

家康公に学ぶ、出世への教訓

いくつもの苦悩や試練を乗り越え、天下統一を果たし、徳川260年の礎を築いた男、家康公。その哲学、生き様は、現代のビジネス社会に通じるものばかり。

リーダー（天下人）の極意を学び、厳しいビジネス戦国時代を生き抜くための教訓にしていきたい。

徳川家康公は、29歳から45歳までの17年間を浜松で過ごした。元龜元年（1570年）に浜松城に移った家康公は、戦いに明け暮れ、多くの武将たちと壮絶な戦いを繰り広げてきた。特に元龜3年（1572年）の三方ヶ原の戦いで、家康公は生涯における難戦を経験する。さらに、力関係において勝っていた織田信長の命令で、正妻であった築山殿を殺害し、長男の信康にも切腹を命じるという苦悩も経験する。これも浜松在住時代のことだ。天下統一を果たすため、さまざまな逆境や失敗を糧に前進し続けたこの時代は、家康公にとってまさに試練の年であった。

天下統一に至るまでの家康公にふりかかった試練とゆかりの地を辿りながら、出世への教訓を導きだしていきたい。

巻

己の失敗を認め、
それを糧とすべし

三方ヶ原の戦い

みかたがはのたたかい

武田信玄軍に大敗した三方ヶ原の戦いは、家康公の人生の転換点。城に逃げ帰った家康公はすぐに絵師を呼び、自らの情けない姿を描かせ、慢心しそうになる度に、それを眺めては気を引き締めたという。自分自身の屈辱的な姿と向き合う懐の深さがあったからこそ、以降慎重に物事にあたり、負け戦をすることなく天下統一を果たすことができたのだろう。



夏目吉信に代表される身代わりに助けられ、命からがら浜松城に逃げ帰る途中、恐怖のあまり馬上で脱糞したとも言われている。

貳

プライドの高さと
粘り強さを持つべし

犀ヶ崖古戦場

さいかがけこせんじょう

三方ヶ原の戦いで惨敗した徳川軍は浜松城へ逃げ帰るが、武田軍は追撃を中止し、犀ヶ崖付近で兵を集めて夜営していた。ここで徳川軍は天下をめざす武士の心意気を見せる。反撃に転じるために一計を案じ、犀ヶ崖に武田軍を追い落とそうと、崖に白い布を張り、橋が架かっているように見せかけ、人馬もろとも犀ヶ崖の谷底へ転落させたという伝説がある。この報告を受けた武田信玄は「勝ちても怖き相手なり」と、20歳も年下の家康公を評したそう。失敗をものともせず、次に生かすテクニックが重要なことは、現代人も同様。失敗を糧に、粘り強く道を切り開いていきたいものだ。



当時の犀ヶ崖は、東西約2km、幅50m、深さ40mに及ぶ切り立った断崖絶壁だったといわれている。



■犀ヶ崖資料館 浜松市中区鹿谷町25-10
tel. 053-472-8383

参

部下から厚い信頼を
得る人であれ

武將たちは負けて捕らわれると殺されるが多かったが、家康公は、たとえ敵の武將でも、優秀な人材は首を取らず、徳川軍として重要な役割を任せていた。命の大切さを知り、人の命をも大切にする家康公は、彼らにとつては命の恩人。いざという時に、自ら身代わりとなり次々と死んでいく家臣たちの忠誠心は、家康公に寄せる厚い信頼なしでは実現しない。

夏目次郎左衛門吉信の碑

なつめじろうざえもんよしのぶのひ



犀ヶ崖古戦場の一角(現在はバス停の前)に夏目次郎左衛門吉信の碑がある。

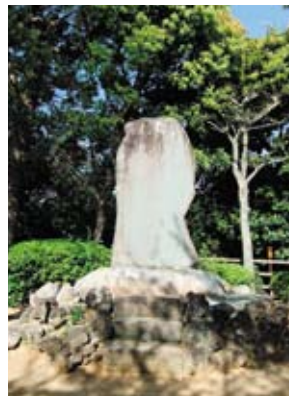
夏目吉信も三方ヶ原の戦いで討死した武將のひとり。三河一向一揆の際、寛大な処置により処刑から助けもらった家康公への恩をかえそうと、身代わりとして武田軍の前に立ちふさがり討死した。

本多肥後守忠真の碑

ほんだひごのかみただざねのひ

本多忠真は、三方ヶ原の戦いで撤退の際、殿(しんがり)をかって出た武將。共に参戦した息子の菊丸に家康公を守るようにと言い残し、刀一本で敵の中に斬り込み、討死した。

※殿(しんがり)／軍が退却するとき、最後尾にあって、追ってくる敵を防ぐ役。



犀ヶ崖資料館の敷地内に建つ。

四 揺るがぬ信念をとつて

正妻築山殿の殺害と 長男信康の自害を乗り越えて。

天正7年（1579年）8月29日、
徳川家康公の正妻築山殿が家康公
の命令により殺害された。

築山殿は今川義元の妹の娘。家康公が今川家の人質であった頃に結婚し、長男信康が生まれたが、今川は織田に桶狭間で倒され、今川家の血をひく築山殿は家康公と別居。信康は信長の娘の徳姫と結婚する。築山殿はこの処遇が面白くなく、甲斐の武田と内通して家康公を倒し、信康をたてて徳姫を排除、武田と連合して仇敵織田を倒さんと図る。それを知った信長は激怒。築山殿だけでなく、その子である信康も殺害するよう家康公に命じた。織田に逆らえない家康公は、泣く泣く家臣に二人の殺害を命じたとの説がある。徳川家繁栄のための辛い決断。言うまでもなく、この時代ならではのやり方だが、ビジョンを忘れず、ぶれない心を持つ大切さは、ここから読み解くことができる。

太刀洗の池

たちあらいのいけ

築山殿を家康公の家臣が殺害した際に、太刀に付いた血を池で洗った場所として伝えられている。現在は史跡碑のみで、池があった面影は感じられない。家臣から殺害の報告を受けた家康公は頷いたあと、小声で「体だけ大きくて頭の回らない奴よなあ。女なのだから尼にでもして逃がしてやればよいものを」と呟いたという。浜松医療センター前の駐車場横にぽつんと史跡碑が建つ様は、家康公と築山殿の寂しく辛い想いを物語っているようだ。



■浜松市中区富塚町328

現在は浜松医療センターバス停前に、太刀洗の池の史跡碑が建っているだけだが、当時はこの南10メートルくらいの場所に藪に覆われた池があったと伝えられている。

二俣城跡

ふたまたじょうあと

天竜川と二俣川に挟まれた天嶮に恵まれた名高い中世城郭。武田信玄と徳川家康が城を巡り、激しい攻防を繰り広げたことで有名だが、家康公の長男である信康が、若くして切腹させられた悲劇の地でもある。このとき介錯人であった服部半蔵は、涙のあまり刀が振り下ろせなかったとの話が残る。



■浜松市天竜区二俣町二俣

天竜浜名湖鉄道二俣本町駅から北に徒歩約10分

西来院

せいらいいん

築山殿の廟堂がある寺院。門を通ると浜松最大最古といわれている六地藏があり、さらに奥に進むと本堂がある。本堂内の祭壇はとてもきらびやかに飾られており、開花時期には美しい藤の花で目を楽しませてくれる。



■浜松市中区広沢2-10-1 tel. 053-452-7584

JR浜松駅北口バスターミナル1番or15番乗り場から出ているバス
全て乗車可能。「鹿谷町南」にて下車、徒歩約15分。

浜松城



永禄11年(1568年)、三河から東進し、今川領の制圧を開始した家康公は、駿府に攻め込んできた武田信玄の侵攻に備え、遠州一帯を見渡せる三方ヶ原の丘に着目。天下を取るためには、まず信玄を倒さなければならないと判断し、元亀元年(1570年)、岡崎城を長男の信康に譲り、三方原台地の東南端に浜松城を築城、駿遠経営の拠点とした。家康公が駿府城に移ったあとも、数々の浜松城主が幕府の重役に出世したことから、浜松城は「出世城」とも呼ばれる。

■浜松市中区元城町100-2 tel. 053-453-3872
http://www.hamamatsu-navi.jp/shiro/

浜松八幡宮



■浜松市中区八幡町2 tel. 053-544-7111 http://www.hamamatsuhachimangu.org/

浜松八幡宮は市中心付近にありながら、多くの樹木が繁茂する鎮守の森に鎮座し、およそ4,500坪の境内地を有している。家康公が祈願所とし、武運長久を祈ったと伝えられている。三方ヶ原の戦いに敗れ、武田軍に追われた際、洞穴に潜んだと言われる境内の御神木「雲立の楠」は静岡県の天然記念物に指定されている。

五社神社・諏訪神社



■浜松市中区利町302-5 tel. 053-452-3001 http://www.gosyajinrya-suwayajinrya.or.jp/

隣接して鎮座していた五社神社と諏訪神社が、昭和35年に合併。両社ともに、後の江戸幕府第二代将軍徳川秀忠(家康公の3男)の産土神とされたことから、子守り、子育ての神として、今でも人々の崇敬を集めている。

鈴木家住宅

「鈴木家」は江戸時代の旧浜松藩で四つあった藩主に単独で面会できる「古独礼(ことくれい)庄屋」で、四家の中でも最も高い格式を持つとされている。家康公は、鈴木家に側室・阿茶の局を預けており、鷹狩りの帰りにたびたび立ち寄ったそう。この阿茶の局は才色兼備であり、戦場にも同伴。関ヶ原の戦いでは小早川秀秋の調略に一役買ったともいわれる。また大阪冬の陣では対豊臣家との和睦交渉にあたったという。阿茶の局は、対内的な参謀として重要な存在であり、まさに家康公にとって縁の下力持ち。この才女なくしては、家康公の天下統一もなかったかもしれない。



■浜松市東区中郡町
現在、鈴木家跡地については立入りができません。

中村家住宅 (国指定重要文化財)

永禄11年(1568年)に家康公が遠江に入国した際、中村家18代正吉は舟を出して迎えるなど徳川につかえ、今切軍船兵糧奉行や代官をつとめていた。こうした関係から、正室・築山殿を恐れた家康公の側室・お万の方は、浜松城でなく中村家の屋敷を借り、第2子である於義丸を出産。その時の後産を埋めた「胞衣塚(えなづか)」が現存している。このお万の方も長身で美しいだけでなく、書に優れ、信仰心の厚い才女だったといわれている。



■浜松市西区雄踏町宇布見4912-1
tel. 053-596-5585

ちょこっと
豆知識

徳川家繁栄には、 女性が大きく 関わっていた!?

家康公には、献身的に支えるたくさんの女性と子どもがいたと伝えられている。その数は正室2人と側室15~19人ほどいたと言われており、思春期から老年にかけてたくさんの子どもを作ったそう。身分や外見で選ぶのではなく「子どもがたくさん欲しい」と出産経験のある未亡人を多く選んだと伝えられている。また、側室の中には鷹狩にも参加し、戦場にも共する心身ともに堅固な才女もいたと言われていた。厳しい戦国時代を勝ち抜き、長い徳川の時代を築いた背景には、強き女性の力が大きく関わっていたようだ。